

《書評》

『次の夜明けに』（現代台湾文学選 1）

徐嘉澤*著、三須祐介**訳、書肆侃侃房、2020 年

大 東 和 重†

本書の第3章「僕らは山の歌をうたうよ」の章まで読み進め、交工楽隊という客家のバンドの、^{ハッカ}「好男好女反水庫」や「我等就来唱山歌」という曲名を見たとき、胸を締めつけられるような懐かしい気持ちになった¹。

私はこのバンドの、これらの歌を収めた CD を持っている。買ったのではない。CD をくれたのは、当時私が勤めていた、旧台南県に所在するある私立大学の教え子たちだった。2001 年、台湾での2年間の日本語教師生活を終え、まもなく帰国というとき、何人かの男女の学生が食事に誘ってくれた。そこで渡されたのが、この CD だった。

簡単な説明は聞いたはずである。当時、旧高雄県の小さな町、美濃では、ダム建設に反対する運動があった。テレビや新聞報道でよく見かけた覚えはないから、のちの反原発運動のような社会を揺るがす大事件ではなかったと思う。おそらくその学生たちはダム反対運動に何がしか関わっていて、CD をお別れの記念にくれたのだろう。

高雄の美濃は客家の人たちが住む町である。バンドのメンバーも客家人で、客家語でダム建設反対の歌を歌っていた。CD をくれた学生たちが美濃の客家人だったのかどうかはわからない。だが私の教えた学生には、北部の新竹出身者をはじめ、客家人がいた。郷里の北埔を案内してもらったこともある。当時好きな客家の音楽家（顔志文老師！）がいた私は、この CD も喜んで聴いた。

それから20年を経て、美濃のダム建設反対運動が小説の中に出てくるのを見たとき、当時何の理解もしていなかった私でさえ、自らの中に記憶が刻まれていて、小説を読むことで記憶が蘇ったのを感じ、不思議な気持ちになった。この小説を読んだ台湾の読者には、もっともっと深く刻まれた記憶をたどるようにして読んだ人が多くいることだろう。さまざまな読み方の可能なこの小説は、記憶と回憶の小説でもある。描かれた事件、土地、人、いずれもが何かを思い出させ、何かを考えさせる。

* 台湾高雄生まれ。国立高雄師範大学卒業、国立屏東師範学院大学院修了。現在、高雄特殊教育学校で教鞭を執りながら、作家活動を行っている。

** 立命館大学文学部教授

† 関西学院大学法学部・言語コミュニケーション文化研究科教授
kaohigashi@kwansei.ac.jp

¹ 本書に章立てはないが、便宜的に第〇章と呼ぶ。

三須祐介氏の翻訳になる、台湾の作家、徐嘉澤（1977年生まれ）の『次の夜明けに』（書肆侃侃房、2020年）は、計11の短篇からなる連作の長篇小説である。

三世代にわたる一つの家族の物語は、必ずしもストーリーが順を追って進むわけではなく、各章を独立した短篇として読むことができる。とはいえ、読み進めるにつれ、ある家族が20世紀後半の台湾現代史の中で、どのような経験をし、どのようなことを考え、また21世紀に入ってどのような現在を生活しているのかが見えてくる。登場人物の人生は、それぞれの時代の事件と分かちがたく結びついている。彼らの経験を語ることは、台湾にとってのその時々を経験を語るに等しい。

台湾の現代史を知る人には無用の解説だが、ごく簡単に記すと、1945年、約半世紀にわたる日本統治が終わり、台湾は中国大陆の国民党政府によって回収された。当初は「光復」を歓迎した台湾人だが、やがて国民党の出先政府及び大陸から来た中国人との間で摩擦が生じる。対立が大きな事件となったのが、1947年の二二八事件である。戦前から台湾に住んできた本省人と、戦後に国民党政府とともにやってきた外省人との対立が激化した事件で、国民党政府による無差別の弾圧は20世紀後半の台湾の歴史に大きな暗い影を落とした。

1950年代から60年代にかけて、国民党独裁の下、白色テロが吹き荒れる中、台湾は経済成長を遂げた。1970年代に入ると民主化を求める声が高まるようになり、「大陸反攻」が夢と消え中華民国が事実上台湾の大きさに収まる1980年代には、「本土化」（台湾化）と背中合わせにして民主化が一気に進んだ。1987年の戒厳令解除、さらに1990年代に李登輝総統が進めた政治改革により、台湾はようやく民主化の時代を迎える。

台湾の変化は現在も歩みをとめていないが、基本的には1990年代に道筋が決まった民主化の時代にあり、その中で政治運動として野百合運動や、近年ではひまわり学生運動が起きた。この民主化の時代を象徴するのが、原住民族による権利回復運動であり、環境保護運動であり、性的マイノリティの権利保障を求める運動であり、また反原発の運動である。本書は、以上の歴史的な縦軸と、同時代の社会運動や事件をあつかう横軸の、両者が重なり合う時点で書かれている。

『次の夜明けに』が描くのは、二二八事件から21世紀初頭までの、台湾人の経験である。民主化の時代以降の台湾文学には、台湾の経験を書く、という大きな流れがある。台湾の戦後文学は、本土化や民主化の潮流と軌を一にし、1970年代半ばの郷土文学論争を経て、たとえ本省人であっても外省人であっても、台湾の経験を、台湾人を主体に描くのが主流となった。描写の対象とされたのは、台湾400年の歴史のうち変化の大きかった、19世紀後半から21世紀初頭にかけて、清朝末期から、日本統治期を経て、戦後の国民党統治期、さらに民主化へと至る時代である。台湾人にとって集団的記憶であるこれらの時代を描くことが文学の大きなテーマとなり、特に小説はその容器としての役割を果たした。本書も、徐嘉澤と同世代の作家、呉明益（1971年生まれ）の『自転車泥棒』（天野健太郎訳、文藝春秋、2018年）や、甘耀明（1972年生）の『鬼殺し』（白水紀子訳、白水社、2016年）も、描くスパンに違いはあっても、台湾人の共同の記憶を描き出す点で共通する。

本書に即して語ってみよう。第1章「次の夜明けに」は、二二八事件に巻き込まれた、新聞記者の夫、林太郎の経験を、妻、春蘭の視点から描く。夫は事件が痛手となって精神に異常をきたし、妻は家族を連れて南部の高雄へと移住する。夫の介護をしながら暮らしを立てる妻は、事件の全貌を理解しているわけではない。しかし、渦中になかった妻の視点から、一歩引いて夫の経験を描くことで、当事者の経験がより切実さをもって描き出される。

三須氏が本書の前に訳した、胡淑雯『太陽の血は黒い』（台湾文学セレクション2、あるむ、2015年）も、本書同様、台湾の歴史的記憶が呼び戻されるしくみの小説だが、テーマの一つはやはり、二二八事件から白色テロに至る記憶である²。エピソードが盛りだくさんという点で両作は共通するが、読後に消化不良の感が否めないほど濃厚な『太陽の血は黒い』に比べ、『次の夜明けに』はスケッチに近い印象とはいっても、凝縮度では劣らない³。

第2章「フォルモサ」が描くのは、一転して1970年代後半の民主化運動である。本章で主役となるのは、父母を第一世代とすると、第二世代に当たる、叔母のもとに預けられて育った次男の起義である。港町高雄の塩埕で育った起義は、父と同じく新聞記者となり、やがて国民党外の民主派勢力の雑誌、『美麗島』の編集に携わり、1979年に高雄で起きた言論弾圧の美麗島事件で逮捕される。台湾の民主化を成し遂げようとの自負心は、かつて「生きるしかばね」だと見下していた父への和解の感情をもたらす。

第3章「僕らは山の歌をうたうよ」では、第1章の夫婦から見ると、第三世代、孫の世代の物語となる。出獄し民進党幹部として活動する起義の息子、哲浩は、父への反発から社会運動などに無関心だったが、恋人の客家人、傑森^{ジェイソン}に連れられて美濃に行き、ダム建設反対運動に触れる。自らが同性愛者だと告白したとき、父子の間に大きな溝が生まれた。変化の大きかった台湾社会では、祖父と父の世代の間にすれ違いや矛盾があったように、父と子の間にも価値観の相違が生まれていた。しかし、傑森とつきあい美濃を知ること、人々が声を上げてきた台湾社会の過去と現在のつながりに、哲浩は思いを馳せるに至る。

第4章の「A7802」は、台湾社会の異なる側面に光を当てる。台湾に住む人々は、先住民族（台湾では「原住民族」と呼ぶ）、戦前台湾へ渡ってきた閩南人や客家人などの本省人と、戦後に国民党政府と一緒にやってきた外省人の、大きく4つのエスニックグループ（「族群」）に分かれる。時代の進展とともにグループ間は融合しつつあるが、近年新たに加わったのが、「新移民」と呼ばれる、東南アジアからの労働者とその子どもたちである。第4章では、高雄の地下鉄工事現場で働く、タイからの男性労働者が描かれ、第6章の「阿美！阿美！」では、高齢者を介護しにフィリピンから来た女性労働者が描写の対象となる。

私が初めて台湾へ行った前世紀末には、工事現場で働く、多分に差別的ニュアンスの「外老」と呼ばれる東南アジアからの労働者が目についた。その後徐々に増えてきたのは、家庭内で働く女性の労働者である。香港では一足早く、フィリピンやインドネシアから来た、家事や育児を請け負うシッターの姿が目立ったが、台湾では高齢者の介護に始まり、やがて家事労働者が増えてくる。私自身の経験でも、2015年、久々に友人宅を訪れた折、もっぱら台所に立つ女性がいて、こんな家族がいたかな、と戸惑った。話すうち、その家の高齢者の介護や家事をする女性を雇ったと知り、こんな一般家庭でも、と驚いた。

第4章では、搾取されるタイ人労働者たちが、弁護士となった、第二世代の起義の兄、林平和の支援を受けて、抗議活動に立ち上がる姿が描かれる。一方、第6章では、第一世代の父親の介護をするためフィリピンから来た家事労働者が、やがて近所の男性と結ばれるいきさつを描く。新移民

² 三須氏に、論文「胡淑雯『太陽の血は黒い』試論 『超級大国民』及び『欲望という名の電車』との関連から」（『植民地文化研究 資料と分析』第14号、2015年7月）があり、訳書とともに併せ読みたい。

³ 『太陽の血は黒い』の書評に、橋本恭子「書評 胡淑雯著 三須祐介訳 太陽の血は黒い」（『中国21』第44号、2016年3月）がある。

たちは一般的に周辺的な弱い立場に置かれている。この章では林平和の活動を通して、社会正義と台湾社会の新たな変化の問題が描かれている。

2つの章に挟まれた、第5章「少年 Y」は、打って変わっていじめの問題をあつかう。第三世代の哲浩は、過去に学校で激しいいじめを受けてきた。大学院で学ぶ中、南部で起きたいじめに起因する死亡事件を知る。二二八事件や美麗島事件のような、権力による弾圧とは異なる形で、台湾社会が抱える生きづらさの問題が扱われるとともに、ここでも声を上げて抗議することの意義が問い返されている。

第7章の「野イチゴの戦い」では、再び起義の視点から、学生たちの政治運動、及び息子との関係が扱われる。民主化のために命をかけて第一線で戦ってきたはずの起義が、今や政治家となって党内に愛人を持ち、子々孫々の繁栄という伝統的規範から逃れられないでいる。しかし、2008年に総統となった国民党の馬英九が、中台関係を急激に密接化する政策を進めると、これに反対して野イチゴ運動が起きた。息子の世代の運動を見て、起義はかつて父を受け入れたように、少しずつ息子を受け入れる。この野イチゴ運動は、本作発表後に起きる、2014年のひまわり学生運動の先駆けとなった。

第8章「公理と正義のドレス」では、第一世代の父親が亡くなるも、母親は高雄の鼓山から動こうとしない。この章で集团的記憶として刻まれているのは、2009年の南部における大洪水、700人近くが亡くなった、八八水害である。台風が近づく中家族はお互いを気につけ、また中年を過ぎるまで独り身だった林平和は、事務所のアシスタントの女性と心を通わせる。そんな中、家族は父が書き残した二二八事件の秘密を知る。

第9章「父なし子」では、第三世代の哲浩と恋人の関係が再び描かれる。傑森が海外留学したことで二人の間に距離ができるが、帰国を機によりが戻る。さらに哲浩と父親との関係を描きつつ、本章にはハンセン病患者の療養施設である楽生療養院や、高雄の第1回 LGBT パレード、さらに原子力発電所の問題が描きこまれるが、高雄の水辺の風景が美しい。

第10章「無声映画」では、第5章の少年 Y の母親を視点とする。亡くなった息子をくり返し回想する中で、やがて事件を機に、人権やいじめやジェンダーに関わるイベントがあれば声を上げるようになった母親は、哲浩らも参加する高雄の LGBT パレードに参加する。

そして終章は2011年、東日本大震災の報が台湾へ伝わる中、平和と起義の兄弟は、父親の残した手記を公表すべきかどうかをめぐって議論する。残酷な真実と虚偽の幸福の間にあって、小さな幸福は果たして偽善なのだろうか。

厚くはない小説の宇宙に、台湾の20世紀後半から21世紀初頭にかけての、さまざまな記憶が刻まれた本書には、弱さを抱えながら声を上げてきた人々の姿が描かれている。それらの人々は決して英雄ではない。等身大の存在が作り上げてきたからこそ、台湾の歴史は輝きを増すともいえる。本書を通して見えてくるのは、この弱さと強さの混在だろう。

最後に、小さな台湾の宇宙と呼ぶべき本書を、読みやすい日本語に訳してプレゼントしてくれた訳者に、敬意と感謝を表したい。